HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	前漢の経師
Author(s)	宮本, 勝
Citation	北海道大學文學部紀要, 24(2), 1-47
Issue Date	1976-03-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33398
Type	bulletin (article)
File Information	24(2)_PR1-47.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

前漢の経師

宮本　勝

前漢の経師

宮本　勝

(一)

紀元前五十一年、宣帝甘露三年、諸儒に詔勅が下され、宮中未央大殿北の石渠閣[1]において、五経の異同を講論する会議が開かれた。宣帝も臨席し、太子太傅蕭望之らが講論の内容を天子に報告し、天子が命を下してこれを決定した。この会議によって、新たに、易は梁丘氏、尚書は大・小夏侯氏、春秋は穀梁氏のそれぞれの学が博士官の講座の中に設けられた。[2]

会議の参加者は各経それぞれ次の通りである。

易家　博士施讎　黄門郎梁丘臨

尚書家　博士歐陽地餘　博士林尊　訳官令周堪　博士張山拊　謁者假倉

詩家　淮陽中尉韋玄成　博士張長安　博士薛廣徳

禮家　博士戴聖　太子舍人聞人通漢

春秋公羊家　博士嚴彭祖　侍郎申輓　侍郎伊推　侍郎宋顯　侍郎許廣
春秋穀梁家　議郎尹更始　待詔劉向　待詔周慶　待詔丁姓　中郎王亥

これに蕭望之を加えて二十三人を数える。官職は会議当時のもので、後大官に至ったものが多い。(3)

この会議の形式は、春秋の講論の模様が、漢書儒林傳の次の記述によってある程度知られる。

召五經名儒太子太傅蕭望之等、大議殿中、平公羊・穀梁同異、各以經處是非。時公羊博士嚴彭祖・侍郎申輓・伊推・宋顯、穀梁議郎尹更始・待詔劉向・周慶・丁姓並論。公羊家多不見從、願請内侍郎許廣、使者亦並内穀梁家中郎王亥、各五人、議三十餘事。望之等十一人各以經誼對、多從穀梁。由是穀梁之學大盛。

五経の名儒太子太傅蕭望之らを召して殿中において大会議を開き、公羊と穀梁との同異を定めた。参加者はそれぞれ各自の経説によって是非を分った。この時公羊家は博士の嚴彭祖、侍郎の申輓、同伊推、同宋顯の四人、穀梁家は議郎の尹更始、待詔の劉向、同周慶、同丁姓の同じく四人が議論を進めたが、公羊家の説が劣勢だったので、公羊家の侍郎許廣を会議に加えるよう申し出た。使者は同時に穀梁家の中郎王亥を会議場に入れ、各家五人づつ、議事内容三十余項について、望之ら十一人が各自の経義によって天子の下問に対えた。結果は穀梁の説がまさった。これより穀梁の学がたいへん盛んになったのである。

春秋以外の会議の模様は詳かでないが、おそらく、五経を総論する本会議と各経に分れた分科会の如きものが行われたと推測される。いずれの会議においても蕭望之が重要な役割を果したことは想像に難くない。いったい蕭望之は后蒼・白奇に従って齊詩を治めた学者であるが（漢書巻七八蕭望之傳）、春秋の会議でも、天子の顧問あるいは判者の如き役を荷負っており、詩の会議に参加した博士薛廣德は蕭望之の推薦であった（漢書巻七一薛廣德傳）。また石渠会議

の詔には蕭望之の名を併せた記述がしばしば見え、会議の推進役であったことは疑いない。議長格とでもいえようか。学問の幅も広く、齊詩を治めるとともに、論語を問い、喪服禮を治めて、京師の諸儒の称揚の的であった（漢書蕭望之傳）。五経名儒の呼称ある所以である。議長格蕭望之のもとに会議は進められ、経の疑義について天子より具体的な下問があり、諸儒は各自の経義経説によって講論審議し、これを逐条奏聞するという形式であった。

この会議の講論の結果は、それぞれ文字に表わされて奏上された。漢書藝文志にこの時の議奏が記録されている。次の通りである。

五經雜議十八篇　石渠論。漢書補注云、「先謙曰、此經總論也。爾雅・小爾雅諸經通訓、古今字・經字異同、皆附焉。」
書議奏四十二篇　宣帝時石渠論
禮議奏三十八篇　石渠。
春秋議奏三十九篇　石渠論。
論語議奏十八篇　石渠論。

五種百五十五篇を数える。これらはすべて失われてしまったが、禮議のみは唐の頃なお存在したらしく、通典及び毛詩既醉疏、禮記王制疏中に散見する。清の馬國翰はこれらを輯めて石渠禮論一巻とし、玉函山房輯佚書に収めている。そして隋書經籍志に、

石渠禮論四巻　戴聖撰

とあることから、これを漢書藝文志の禮議奏と見做して、撰者を戴聖とする。他の議奏も禮のように、各経ごとに執筆者を分担して書かれたのであろうか、それは詳かでない。ところで藝文志には易と詩の議奏が見えない。易につい

ては、易の会議に参加したのは師弟関係にあった施讎と梁丘臨の二人のみで、特に異同がなかったのであろう。漢初、田何が易を伝え、三伝して田王孫に至り、宣帝のとき門下の施讎・梁丘賀・孟喜がそれぞれ一家を成し、後、易は施氏系・梁丘氏系・孟氏系の三学派に分れてゆく。当時孟喜は師法を改めたと非難され、博士官の欠員があったときも博士に補せられず、孤立していた。逆に施讎・梁丘賀の二門は、賀が少府を拝し政務多忙で教授に専心する暇がなくなり、子の臨や弟子の張禹を施讎に学ばせるなど、門を分っていてもその交流は密であった。施讎が博士となったのも少府梁丘賀の推薦である（漢書巻八八儒林傳）。易説の内容も、孟喜は「易家の陰陽災変を占候する書」を手に入れたと自ら称誉し、後に劉向が秘府の図書を校して、「考易説、以為諸易家説、皆祖田何・楊叔・丁將軍、大誼略同。唯京氏為異。黨焦延壽獨得隠士之説、託之孟氏、不相與同。」（漢書儒林傳）と述べているが、京氏易は孟喜・焦延壽の陰陽災変的易説とその占候を大成したものであり、つまり諸家の易説は大義はほぼ同じいが、孟氏易だけは異類に属していたのである。田何以来の訓詁義理を説く施氏・梁丘氏と、同じく田王孫に学びながら陰陽災変を以て易を説く孟氏易とは、甚だ大きな懸隔があったが、この孟氏系の学者が石渠に参加しなかったことは、会議においても活発な議論の行われなかったことが想像されるのである。詩についても、会議の参加者は、韋玄成・張長安・薛廣徳、皆魯詩を治め、張長安・薛廣徳はともに王式に師事し、王式と、韋玄成の師であり父である韋賢とは、同門である（漢書儒林傳）。やはり経義の異同はなかったのであろう。ところでまた議奏の中に論語がある。当時、論語が盛んに読まれていた証拠であるが、漢書藝文志にはその伝授が述べられている。

漢興、有齊・魯之説。傳齊論者、昌邑中尉王吉・少府宋畸・御史大夫貢禹・尚書令五鹿充宗・膠東庸生、唯王陽（師古曰、王吉字子陽、故謂之王陽）名家。傳魯論語者、常山都尉龔奮・長信少府夏侯勝・丞相韋賢・魯扶卿・前將軍蕭望之・

安昌侯張禹、皆名家。張氏最後而行於世。

右の多くは経師であり、武帝以前のものはいない。武帝が五経を表章し博士を置いてより、経以外の儒家の書までも次第に読むようになって、伝授の跡が明らかになった。また宣帝の時に蕭望之が皇太子に論語を授け（漢書蕭望之傳）、夏侯勝が詔を受けて論語説を撰した（漢書巻七五夏侯勝傳）などの関係より、ここに論語の議奏がなされたのであろう。

石渠会議の論議を成立せしめた直接の契機は公羊と穀梁の論争にあったことは、漢書儒林傳に述べる次の経過によって明らかである。

瑕丘江公受穀梁春秋及詩於魯申公、傳子至孫爲博士。武帝時、江公與董仲舒並。仲舒通五經、能持論、善屬文。江公吶於口、上使與仲舒議、不如仲舒。而丞相公孫弘本爲公羊學、比輯其義、卒用董生。於是上因尊公羊家、詔太子受公羊春秋、由是公羊大興。太子既通、復私問穀梁而善之。其後浸微、唯魯榮廣王孫皓星公二人受焉。廣盡能傳其詩・春秋、高材捷敏、與公羊大師眭孟等論、數困之、故好學者頗復受穀梁。沛蔡千秋少君・梁周慶幼君・丁姓子孫、皆從廣受。千秋又事皓星公、爲學最篤。宣帝卽位、聞衞太子好穀梁春秋、以問丞相韋賢・長信少府夏侯勝及侍中樂陵侯史高、皆魯人也。言穀梁子本魯學、公羊氏乃齊學也、宜興穀梁。時千秋爲郎。召見、與公羊家並說、上善穀梁說、擢千秋爲諫大夫給事中、後有過、左遷平陵令。復求能爲穀梁者、莫及千秋。上愍其學且絶、乃以千秋爲郎中戸將、選郎十人從受。汝南尹更始翁君本自事千秋。能說矣。會千秋病死、徵江公孫爲博士。劉向以故諫大夫通達待詔、受穀梁、欲令助之。江博士復死、乃徵周慶・丁姓待詔保宮、使卒授十人。自元康中始講、至甘露元年、積十餘歳、皆明習。乃召五經名儒太子太傅蕭望之等、大議殿中、平公羊・穀梁同異。

瑕丘江公（大江公）は穀梁春秋及び詩を魯の申公より受け、子に伝え、孫（小江公）は博士となった。武帝の時、

小江公は董仲舒と一緒であった。董仲舒は五経に通じ、弁が立ち文も巧であった。小江公は訥弁で、天子は董仲舒と議論させたが董仲舒に及ばなかった。また丞相公孫弘はもと公羊学を治めていて、二人の議論を比べ合せて、結局董仲舒を用いたのである。かくて天子は公羊家を尊び、太子（衛太子、武帝の長子）に公羊春秋を学ばせた。これから公羊は大いに興ったのである。太子は公羊を学びおえてから、またひそかに穀梁を学び、これを善しとした。その後穀梁は次第に衰えたが、ただ魯の榮廣字王孫と皓星公の二人だけが、瑕丘江公に穀梁を受けていた。榮廣は詩・春秋をことごとく受け伝え、高才聡明で、公羊の大師眭孟らと議論してしばしば苦しめた。それで学を好むものはふたたび穀梁を受けるようになった。沛の蔡千秋字少君・梁の周慶字幼君・丁姓字子孫、皆榮廣に従って穀梁を受けた。蔡千秋はまた皓星公に師事し、最も篤学である。宣帝が即位して、衛太子が穀梁春秋を好んだと聞き、丞相韋賢・長信少府夏侯勝及び樂陵侯史高、みな魯の人だったので、彼等に穀梁の是非を尋ねると、「穀梁子は魯学に本づき、公羊氏は斉学です。穀梁を興すのがよいでしょう」と対えた。この時、蔡千秋は郎となり、召し出されて公羊家と並んで春秋を説いた。天子は穀梁説を善しと認め、蔡千秋を諫大夫給事中としたが、後、過失があって平陵の令に左遷した。そこで他に穀梁にくわしいものを求めたが、蔡千秋に及ぶものはいず、天子は穀梁の学が途絶えんとするのを憂い、また蔡千秋を呼んで郎中戸将とし、郎のなかから十人を選んで授業を受けさせた。その中では汝南の尹更始字翁君が初めから蔡千秋に師事していてよくできた。たまたま蔡千秋が死んだので、大江公の孫を呼んで博士とした。劉向は故の諫大夫通達を以て待詔し、穀梁を受けて、江公博士を助けた。江公博士がまた亡くなり、そこで周慶・丁姓を呼んで保宮に待詔せしめ、十人に授けて学業を卒えさせた。元康（前六五年より）中より講義が始まり、甘露元年（前五三年）まで、十余年間の学習で、全

員よく習得した。そこで五経の名儒太子太傅蕭望之らを召して、殿中において大会議を開き、公羊と穀梁との同異を定めた。

石渠会議の後、新たに穀梁学が博士官に設けられたが、実は十数年以前から準備され、すでに博士官に設置さるべく御膳立てが整っていたのである。そしてこれは武帝と宣帝との学問に対する嗜好の差異であると同時に、齊学と魯学の対立であった。いったい武帝の時に朝廷の重立った儒者はみな齊学である。五経博士官設置を建言した公羊の董仲舒はいうまでもなく、学制を定めた丞相公孫公はもともと公羊学を治め、御史大夫となった兒寛も齊学の系統に属する。魯学の祖師申公の弟子は、業を受けるもの百余人、博士となるもの十余人（史記巻一二一儒林列傳）といわれるが、朝廷における政治的役割は全くない。齊学と魯学との大きな相違は、魯学の、伝統的訓詁を守る謹厳実直の学風と、齊学の、陰陽災変を採入れ人事に応用する実用の学風とであろう。漢書藝文志に云う、

漢興、魯申公爲詩訓故、而齊轅固・燕韓生皆爲之傳。或取春秋、采雜說、咸非其本義。與不得已、魯最爲近之。

魯詩の純粋と齊・韓詩の雑駁とを言っている。齊・燕の詩学はきわめて近いことが分る。また史記儒林列傳に云う、

申公獨以詩經爲訓以教、無傳、疑者則闕不傳。訓とは経の字義を明らかにし、傳とは経義を解説することである。申公が、字義を説き明かすのみで経義の解説をしなかったところに魯学の謹厳な学風を見る。「獨」とあるのは齊・韓詩の経師が解説をしたということで、漢書藝文志の齊后氏傳・齊孫氏傳・齊雜記・韓内外傳の類である。この謹厳な学風は申公の後学もよく守った。武帝の時、封禪の儀を起そうとし、「武帝は儒術を採用してこれを文飾しようとした。ところが儒者たちは封禪のまつりの仕方を説明できないばかりか、詩・書の古記録に拘泥して進展しない。そこで天子は封禪のまつりの器具を作って儒者たちに示したが、あるものは『古のものと同じでありません』と言い、徐

偃はまた、『この礼は、魯の儒生の礼儀には及びません』といい、周覇は儒者を集めて封禅の計画を練った。そこで天子は、徐偃・周覇を退け、儒者たちを用いなかった。」（史記巻二八封禪書）。徐偃・周覇はともに申公の弟子で（史記儒林傳）、かく古式を墨守して武帝の意に逆い、斥けられた。申公の遺風であろう。武帝は、後に封禅の事を兒寛に尋ねているが、兒寛は天子の意を迎えて対え、これより親幸され、御史大夫を拝した（漢書巻五八兒寛傳）。兒寛は千乗（秦時の齊県の地）の人で、尚書を治め、歐陽生に師事した。歐陽生の学は濟南の伏生にもとづく。ここにもまた魯学と齊学の相違が窺えるであろう。武帝は儒術を以て政事を縁飾し、それにはことごとく齊学にもとづく儒者の意見を採用したのであった。かかる情況に対する穀梁魯学の台頭が、石渠会議を成立させた直接の契機である。

紀元七十九年、章帝建初四年、楊終の進言により、太常に詔勅が下され、将・大夫・博士・郎官及び諸生諸儒を、殿中の白虎観に集めて五経の同異を論議する会議が行われた。この会議は宣帝の石渠会議の故事に倣って行われたものである。[4] 会議の結果は石渠の時と同じく議奏が編集され、現存する班固撰白虎通がそれと見做されている。白虎観会議を成立させた直接の動機は、今文学に対する古文学の抗争、公羊に対する左氏の進出にあるということがいわれている。しかし、狩野直喜博士は、白虎観で五経の同異を定めた事は、決して広汎な意味の五経の同異、即ち今古文学の争を解決し、経義を一定するためのものではない。五経の同異ということは、今文学の内にて師法より多くの家法が出で、経説が混乱していた所から、これを一定したと見るのが適当である（兩漢文學考）と、その動因を、多岐に派生した家法経説の調整にあったと説いておられる。たしかにその通りで、これは白虎観会議の時の詔書を見ると、このいきさつがよく分る。

建初四月十一月壬戌、詔曰、

蓋三代導人、教學爲本。漢承暴秦、褒顯儒術、建立五經、爲置博士。其後學者精進、雖曰承師、亦別名家。孝宣皇帝以爲去聖久遠、學不厭博、故遂立大・小夏侯尚書、後又立京氏易。至建武中、復置顏氏・嚴氏春秋、大・小戴禮博士。此皆所以扶進微學、尊廣道藝也。中元元年詔書、五經章句煩多、議欲減省。至永平元年、長水校尉鯈奏言、先帝大業、當以時施行。欲使諸儒共正經義、頗令學者得以自助。孔子曰、學之不講、是吾憂也。又曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。於戲、其勉之哉。

思うに、三代では人を導くのには教学を根本とした。漢は暴秦の後を承けたので、まず儒術を顕彰して五経を立て、このために博士を置いた。かくして学者は学問に精励した。だが、師の説を承け伝えながらも、また別に一家の学を名乗るものがあって、段々と学問が分れてきた。昔孝宣皇帝は、聖人の時代から遠く隔っているから、学問は博く伝えるのがよいと考え、そこで大・小夏侯尚書を学官に立て、後にまた京氏易を立てた。光武皇帝の建武中（後二五年から五五年まで）に、また顏氏・嚴氏春秋と大・小戴禮の博士を置いた。これらはともに微学を進め、道芸を広めることになったが、経学の門戸は広がる一方であった。そこで帝も中元元年（後五六年）詔して、五経の章句煩多につき、論議して減省させようとしたのだが、ほどなく薨じた。孝明皇帝の永平元年（後五八年）に至り、長水校尉の樊儵は、「先帝の大業は時を以て施行されねばなりません、諸儒をして共に経義を正し、学者の便を計らしめよ」と上奏したが、今こそこれを実行しよう。孔子も云う、「学の講ぜざる、これ吾が憂いなり」（論語述而の言葉）と。又云う、「博く学びて篤く知り、切に問いて近く思う」（論語子張）と。ああ、これに勉めよ。

白虎観会議は、この詔勅に言うように、一師の門より各々一家を成し多くの分派を生じて、経学の門戸が広がる一方

で学門の統一がつきかね、「五経章句煩多につき経学の減省整理」という多年の課題の実行に、その目的があったのである。しからばこの白虎観会議の先蹤となった石渠会議も、その直接の契機は、公羊に対する穀梁の興起にあったにせよ、右の詔勅に位置づけられているごとく、家法の興起と経学の整理の一過程として、白虎観会議の延長線上に置いて考察する必要があろう。

以上のような見通しを持ち、石渠会議前後の時代の家法の興起について、以下、第二節では、漢初武帝に至るまでの儒者の消息を述べ、第三節では、武帝の時の官吏養成と儒術について述べ、第四節では、昭宣時代の家法興起について述べるまでである。

(二)

儒学は、秦始皇の焚書阬儒、項羽の阿房宮焼き払い、秦漢の際の戦乱などによって大きな打撃を受けたが、絶滅するまでには至らなかった。それが、馬上にて天下を取った高祖の時は、海内統一のためいまだ学術の事には暇がなく、文帝・景帝のころに漸く学術復興の機運があらわれ、やがて武帝の五経博士設置、公孫弘の学制に及ぶが、この漢初学術復興の時代の儒者の消息を、中央朝廷と地方情況とに分けて、尋ねてみよう。

中央朝廷

高祖の時には、酈食其・陸賈・朱建・劉敬・叔孫通が居る。皆高祖の下に騁せた「縉紳之徒」(漢書巻四三贊)儒服の者である。また隨何がいる。隨何は風俗通によると博士であった(廣韻に引く)というが、詳かでない。このうち、叔孫

通を除いては、みな儒者としての学問や役割りを買われたというわけではないようである。酈食其は車の横木にもたれたまま齊の七十余城を下した弁舌の士である（漢書巻四三酈食其傳）。陸賈は帝前でときどき詩や書を説いたと云うが、むしろ高祖を悦ばせた働きは、南越に赴いてこれを服せしめたことにあった。当時の人は彼を「有口辯士」と称したという（漢書巻四三陸賈傳）。劉敬（本姓は婁。後高祖より劉姓を賜った）は匈奴に使して和親の約を結び、また齊の田氏をはじめ六国の有力豪族十余万人を関中に徙して一日有変に備えた（漢書巻四三婁敬傳）。隨何は淮南に赴き英布に説いて漢に帰服させ、ついで楚を滅し、弁を以て時に称せられた（史記巻九一黥布列傳）。以上はみなむしろ政略家として天下平定のために働き、儒学の興隆とはあまり関りないようである。叔孫通は故の秦の博士で、のち漢に降って博士となり、高祖のために宮中の儀礼を制定した。高祖はその性格として儒術を好まず、その昔、沛公と呼ばれていた頃、儒者の冠を著けてやって来る連中には、その都度冠を脱せてその中に小便したとか（史記巻九八酈食其傳）、隨何の功を無親して「隨何は腐れ儒者だ、天下を治めるのに腐れ儒者など必要ない」と罵ったとか（史記黥布列傳）、皇帝となってからも、陸賈がときどき詩や書を説いてこれを称えると「乃公は馬上で天下を取ったのだ。詩書など問題にする必要はない」といったという（史記巻九七陸賈傳）。こういう逸話の示す通り、儒学には一片の関心すら持たなかったが、天下を平定した後は、軍旅の秩序とは異る朝廷の形式を整える必要に迫られ、儀礼にくわしい儒者の知識を借りざるを得なくなった。沛に兵を挙げたころより高祖に従って来た庶人出身の、いわば無頼の軍吏を宮廷の秩序に組み変えねばならなかったのである。叔孫通の採用はこのような要求に応ずるもので、その結果は、これまで「群臣たちは酒を飲んでは戦功を言い争い、酔ってむやみに大声をはりあげたり、剣を抜いて宮殿の柱を撃ったり」という全く無秩序であった朝廷も、高祖の七年、長樂宮が完成して、年始めの朝儀にはまことに秩序整然たるものを得て、高祖も

「わしは今日はじめて皇帝たるの尊さを知った」と感歎したという（史記叔孫通傳）。叔孫通の場合は、儒術が漢廷において果した一応の役割りではあるが、経の訓詁解釈を伝えるいわゆる経学の上の役割りではない。ただ、魯の高堂生は士禮十七篇を伝え（史記・漢書儒林傳）、尚書正義序周禮興廃に賈公彦は「漢興至高堂生博士傳十七篇」といい、かつて博士だったということになるが、高祖の朝廷の博士だったのか、あるいは故の秦の博士であったのか、詳かでない。高祖の博士だったとしても、叔孫通と同じく儀礼を飾る上での知識としての採用に相違なく、士禮十七篇を伝えたという経学上の儒林傳の記述は、魯の地のことである。おそらく高堂生は地方の経師の一人であろう。

惠帝の時には、孔襄がいる。孔襄は孔子九世の孫で、惠帝の時博士となり、長沙の太守（漢書巻八一孔光傳では長沙王の太傅）に遷った（史記巻四七孔子世家）が、どの経を治めたか詳かでない。

文帝の時には申公・韓嬰・徐生・賈誼・賈山・鼂錯・公孫臣・張生らが居る。徐生・賈山を除いてはみな文帝の時に博士となった。賈山は潁川の人で、祖父は六国時の魏王の博士弟子であった。賈山はこの祖父に学び、「言う所書記に渉猟し、醇儒たる能わず」と評され、純粋に儒学のみを学んだ学者ではないが、「治乱の道」を奏上して、『至言』と名付けたという（漢書巻五一賈山傳）。博士賈誼は、漢書儒林傳によると左氏春秋を修め、儒学を治めたには相違ないが、また「頗る諸子百家の書に通じ」た（史記巻八四賈生傳）博学者で、やはりいわゆる純儒ではない。賈誼の学説を基礎として成立したと思われる『新書』も、その内容は儒家・道家・法家の折衷的傾向をもっている。鼂錯は潁川の人で、軹の張恢先生に申商刑名の学を学んだ。文学に長じていたところから太常掌故を拝し、そのころ天下に尚書を治めるものが希で、ただ故の秦の博士で、濟南の伏生が居ると聞き、鼂錯に命じて尚書を学ばせた。のち帰って博士に遷った（史記巻一〇一鼂錯傳）。もともと申商刑名が本領で漢書藝文志に法家鼂錯三十一篇がある。公孫臣は魯の人

で、漢の土徳を説き、正朔を改め服色を易えることを起草した(史記封禪書)。博士を拝したが、どの経を治めたか分らない。経学の上での師承とは関りなかろう。以上は、儒学に限らず、広く学問を治めて言を進め、あるいは博士となったもので、このころの学問復興の気運はこのように盛り上がったが、経学の面から見ればその果した役目は低い。これに対して、経の訓詁を伝え、義理を説いて経学の祖師といわれる人は申公と韓嬰である。申公は魯の人で、高祖の同父少弟の楚元王交とともに斉人浮邱伯に魯詩を受け、文帝の時召し出されて博士となった。独り詩経の訓詁を教え、疑わしきところは措いて解説しなかったという(史記儒林列傳・漢書巻三六楚元王傳)。韓嬰は燕の人で、韓詩を治めて博士となった。詩経の意を敷衍して韓詩内外傳数万言を作った。その語は斉魯間の詩経の説とすこぶる異っていたが、その趣旨は同一であったという(史記儒林列傳)。また張生は濟南の人で、故の秦の博士で同郷の伏生より尚書を学び、博士となった(史記儒林列傳)。徐生は魯の人で、よく礼容をなし、礼官大夫となった。漢のよく礼容をなすものは、皆徐氏に本づくという(漢書儒林傳)。経の訓詁義理を伝え、礼容を行って弟子の養成にあたった、いわゆる儒学専門の経師が、ここに始めて中央朝廷に現れたのである。

景帝の時には轅固生・胡母生・董仲舒が博士となった。轅固生は斉の人で、斉詩を治めて博士となった。よく弟子を教え、詩経を治めて顕貴の地位についた斉の諸人物は、すべて轅固生の弟子である(史記儒林列傳)。胡母生は斉の人で、公羊春秋を治めて博士となり、年老いてから郷里に帰って教授し、斉の地方で春秋を説く者は、多く胡母生から学業を受けた(史記儒林列傳)。董仲舒は廣川の人で、彼も景帝の時に博士となっている(史記儒林列傳)。

このように文帝・景帝時代の博士などを見ると、儒学が盛んに興った観があるが、漢初の学問の復興は、儒学よりもむしろ黄老の学であったことは史伝に多くの證がある。いま史記儒林列傳序を見ると、漢初の儒学興起の経過を次

のように述べている。

漢興、然後諸儒始得脩其經藝、講習大射鄉飲之禮。叔孫通作漢禮儀、因爲太常、諸生弟子共定者、咸爲選首、於是喟然歎興於學。然尙有干戈、平定四海、亦未暇遑庠序之事也。孝惠・呂后時、公卿皆武力有功之臣。孝文時頗徵用、然孝文帝本好刑名之言。及至孝景、不任儒者、而竇太后又好黃老之術、故諸博士具官待問、未有進者。

漢が興ってはじめて諸儒は経書を修得し、大射・郷飲の礼を講習することができた。叔孫通が漢の礼儀を作り、その功によって太常となり、その諸弟子のうちで叔孫通とともに礼儀を制定したものは、みなまっさきに任官した。かくて高祖は儒術の衰退を嘆いて学問を興そうとしたのだが、まだ干戈のことがあって四海を平定しており、学校を整えるいとまがなかった。孝惠帝・呂后の時代には、公卿はみな武力によって功績のあった臣であった。孝文帝の時代にはやや文学の士が位に登るようになったが、しかし、孝文帝は本来刑名家の言を好んだのである。孝景帝の時代になると儒者を登用せず、竇太后もまた黃老の術を好んだ。それゆえ諸博士はただ員数として官に具わるだけで、昇進する者はなかったのである。

特に景帝の母、竇皇后は、武帝の時まで生存し、太皇太后として大いに権力を振ったが、この竇太后は、黃老の術を好んだばかりでなく、儒学を嫌ってこれに迫害さえ加えている。竇太后が博士轅固生を召して老子の書について問うた時、「これは家僕奴隷の言で取るに足りません」とけなしてほとんど殺されそうになった。またこれは武帝の代であるが、ともに申公に詩を学んだ郎中令の王臧と御史大夫の趙綰が儒学を尊び、師の申公を迎えて明堂を設けようとしたが、竇太皇太后の怒りに触れ、過失を責められて後に二人は自殺したという（史記儒林列傳）。

地方情況

以上のように、高祖の時代には、経の訓詁を伝え、弟子に教授する、いわゆる経師は、まだ中央朝廷に現われていず、その出現は、文景時代に入ってからであり、特に好文の王、文帝が、高祖以来の武断政治を改め、大いに学問を奨励して学術復興の気運が熟し、しかし刑名黄老の学が盛んな中にも、申公・韓嬰が博士に任ぜられ、ここに初めて儒学も勃興の萠を現わす。かかる経師が中央朝廷に出現する背景として、一方に、地方の民間社会における儒者たちの活動を看過するわけにはいかない。いったい秦始皇の思想統一や、楚漢の抗争などによって、先秦儒学を受け継いだ人々は、その活動に著しい制約を受けていたが、儒学が当時まったく逼息していたわけではない。地方に匿れ逃れた儒者や、密かに藏された経籍があったのであり、史記孔子世家によると、孔子の没後、「魯では代々相伝えて、毎年の祭祀には孔子の冢を奉詞し、諸儒もまた礼を講じ、孔子の冢の前で郷飲酒の礼や大射の礼を行った。これは漢に至るまで二百余年にわたって存続した」とあり、また史記儒林列傳によれば、「高祖が項籍を誅してのち、兵を挙げて魯を包囲したが、魯国の儒者たちは、それでもなお書を講誦し、礼楽を習い、絃歌の声が絶えなかった」とあるように、魯や齊の地方を中心とした民間において、礼楽を実践し、あるいは弟子を集めて教授する儒家の徒の活動はかなり活発に行われていたのである。史伝には、秦漢の際に活躍した人々の中にも、儒学的教養を身に具えたものも数多くおり、たとえば、張耳と刎頸の交を結んだ陳餘は、初め儒術を好んで富豪公乗氏に見出され（史記巻八九陳餘傳）、高祖の功臣張良はかつて淮陽で礼を学んだ（史記巻五五留侯世家）。前記の高祖に仕えた隨何・陸賈・劉敬・朱建などもこの中に数えられ、もちろん叔孫通も魯の儒生を引き連れて漢儀の制定に参画したのである。史伝の表面に名の表われたこうした人々の背後に、彼らに教え伝えた儒学者の影を見ることができよう。とりわけ田何と伏生とは、地方に在って経の訓詁を伝え、漢代経学の祖師となった。

田何は齊の淄川の人で、紀元前一九八年、高祖の九年に楚や齊の豪族を関中に徙した（史記巻八高祖本紀）とき、田何も齊の田氏一族とともに杜陵に徙り、杜田生と号した。易を伝えて、王同・周王孫・丁寛・服生に教授し、漢の易を治めるものはみな田何を祖師とするという（漢書儒林傳）。もっとも史記儒林列傳によると、田何は王同に授けた、とのみ云っているところからすれば、あるいは田何の易説を専ら伝えたのは王同であろうか。王同は東武の人で、その生平は未詳であるが、景帝の時、梁孝王武の将軍として活躍した同門の丁寛とほぼ同時として、王同が学を積んだのは、景帝以前ということになろうが、彼も民間の経師の一人である。漢書藝文志に、易傳王氏二篇があり、晁説之は、漢の易家の著作は王同より始まる（王應麟考證に引く）と云っている。王同の門下生は、武帝の初めのころに皆易を治めて大官に至ったという（漢書儒林傳）。

伏生（名は勝）は濟南の人で、故の秦の博士であったが、焚書の際に、尚書百篇を壁中に匿して守った（史記儒林列傳、百篇と云うは論衡正説篇）といわれ、文帝の時、尚書にくわしい者を求めて伏生のことを聞き及んだが、その時伏生は九十余歳で出仕することができなかった。尚書を専ら齊魯の地方で教え、儒学に志すものはこのために尚書を論ずることができ、山東地方の多くの大学者たちはよく尚書に通じ、これを教えないものはいなかった。伏生は歐陽生・孔安國・張生らに教授し、張生は博士となった（史記及び漢書儒林傳）。張生は師と同郷の濟南の人で、博士となったのは景帝の時か武帝の時か、詳かでない。孔安國はもともと申公に従って魯詩を学び、また尚書を治めて武帝の時に博士となり、臨淮の太守に遷った（史記孔子世家）。また歐陽生門下の兒寛は、群国より選ばれて博士官のところで孔安國より学業を受け、中央朝廷に出仕し、武帝の元封元年（前一一〇年）には御史大夫の大官に登った（漢書兒寛傳）。昭帝宣帝の頃に一家を成した尚書歐陽・大小夏侯氏は、みな兒寛より出ているといい（漢書儒林傳）、武帝時における人材とし

て公孫弘・董仲舒と並んで「雅儒」と評されている（漢書巻五八贊）。また丁寛は景帝の時、梁に在って孝王の将軍であったが、易説三万言を作り、ここで田王孫に教え、田王孫の門下より施・孟・梁丘三氏の易が興っている（漢書儒林傳）。

田何や田王孫はいうなれば民間の経師であるが、中央朝廷に出仕した前述の、詩の申公・轅固・韓嬰、春秋の胡母生・董仲舒らも、もともと主として民間で弟子を教えていたのである。史記儒林列傳によれば、申公は「魯に帰り退いて、家にとじこもって教授し、終身家の門を出なかった。弟子は遠方からやって来て、学業を受けたものが百余人（漢書儒林傳によると千余人）あった」といい、轅固生は齊で教え、「齊で詩を論ずる者はみな轅固生に本づき、詩を治めて顕貴の地位についた齊の諸人物はすべて轅固生の弟子であった」といい、韓嬰は燕に在って、「燕・趙地方で詩を論ずる者はみな韓嬰によった」といい、董仲舒は家に在って「帷を下して講誦し、弟子たちは古い弟子が順次より新しい弟子を教えることによって学業を受け、なかには師の顔を見なかったものもいたという。凡そ三年間も自家の庭園さえ見ないほど学問に励んだ」という。弟子の養成は主として家郷で行われていたことが分る。同時に当時の経師たちの学問熱心と、儒学興隆の気運をよく示している。武帝時代に至るまでの儒学は、こうして民間において強い潜在勢力を蓄えていたのである。

先に述べたように、文景時代は中央朝廷においては刑名黄老の学が支配的で、儒学は甚だ微弱で漸く復興の萠を現わして来た時代であるが、他方、地方の藩国においては、儒学に熱心な王侯も現われ、あるいは藩国に仕えた儒学者たちの手によって、徐々に地方皇族の儒学教養化が進んでいたことも、考えておかねばならない。刑名であれ黄老であれ全体的に学術に向う風気の時代のもとに、中には儒学を尊ぶ皇族も現われ始めたのである。漢書楚元王傳によれば、劉交―後の楚元王は、高祖の同父少弟で、書物を好み、若いころから申公とともに齊人の浮邱伯に師事して詩を

学んだ。特に申公と親交が深かったようであるが、この頃の同学の仲間には魯の穆生や白生がおり、楚王に封ぜられてからは、穆生・白生・申公の三人を中大夫とし、常に敬礼していたという。君臣の違いはあっても、詩を以て集った同学の志という感が強く、皆で詩経を誦し、申公が魯詩の伝を作ると、元王自身もそれを綴集して元王詩と号した。また元王の子、郢客も呂后のころ浮邱伯が長安に在った時、申公と連れ立って浮邱伯に師事した。申公はこの時、学業を卒えたという。申公は文帝の時に朝廷に出て博士を拝したが、ほどなく官を失い、その頃ちょうど楚では元王交が薨じて、郢客が嗣いで夷王として立ったが、申公は夷王のもとに帰って、また中大夫として待遇を受けている。楚元王父子の申公に対する厚い敬愛とともに、詩経に対する関心の深さが窺い知れる。通志氏族略によると、白生は楚元王の博士であったともいう。史記五宗世家に「太史公曰、高祖時、諸侯自除御史・廷尉正・博士」とあり、これによれば漢初には藩国によっては博士があったことは確かで、漢書儒林傳には河間獻王の博士に小毛公・貫公が見える。通志氏族略の記載が確かだとすれば楚元王は博士を置いて儒学を奨励したのである。

河間獻王德は景帝の子で、漢書景十三王傳によれば、学を修めて古を好む実事求是の人である。広く民間より善本を収集し、その書籍の量は朝廷の図書と等しかった。集めた書籍はみな先秦の古文で、周官・尚書・禮經・禮記・孟子・老子の類で、七十子の徒の論じた経伝説記であった。四方の遠方より好学の王を慕って集まる人士が多く、なかには先祖の旧籍を携えてくるものもあった。獻王自身も儒学に篤く、礼楽を修め、被服動作すべて儒者の法に従い、山東の諸儒は多く獻王の客となった。六経を尊び、毛詩と左氏春秋の博士を立てた。漢書儒林傳には、河間の博士に毛詩博士趙人毛公と左氏春秋博士貫公の名が見える。毛詩は毛公より三伝して徐敖に至り、以後、毛詩を言う者は徐敖に本づく。左傳は貫公より五伝して劉歆・賈護に至り、以後、左氏を言う者は劉歆・賈護に本づく。毛詩・左氏傳は河

間の地に培われた学問であった。河間獻王が薨じたのは、武帝元光五年（前一三〇年）で、すでに建元五年（前一三六年）に中央朝廷に五経博士の設置をみており、獻王の晩年には儒学は中央の舞台に乗っているのであるが、河間の地ではそれ以前から儒学がもてはやされており、それは、学を好み自ら儒学的教養を求めた獻王自身の人柄に存するのである。また淮南の地では、高祖の孫劉安は好学の王として知られ、諸国より多数の賓客が集まり、しかし多くは方術の士で、河間の地の儒学に対してここは道家の学が盛んであったが、学問復興という面から見れば、学術の一つの中心地であった（漢書巻四四淮南王傳）。そして、この劉安の賓客によって撰せられた淮南子を見ると、修務訓などは明らかに儒家の手に成ったものであり、淮南の地にも儒家の徒は集っていたのである。

楚元王や河間獻王のような儒学に熱心な好学の王がいたと同時に、漢初における皇族が儒学的教養を身につけてゆく過程には、地方皇族子弟の教育に携った儒者たち、もその役割を、一方では担っていたことであろう。漢書儒林傳によると、楚元王が薨じたのち立った郢客は、申公を太子戊の傅育に当らせている。もっとも戊は学問ぎらいで、戊が楚王となったときに申公は疎んじられて郷里に退くが、郢客が儒者の申公を太子の教育係に命じた意図は窺える。また轅固生は博士ののち清河の太傅となり、韓嬰は博士ののち常山の太傅となり、賈誼は梁の太傅であった。漢初文景の頃に中央朝廷に登場した儒者たちは、まだ一般行政を担当する役割りは無く、ただ博士として員に具わるのみで、昇進するものはなかった。しかし多くの博士は藩国に散り、地方皇族の儒学教養化の促進にあずかって力あったことが想像されるのである。

(三)

武帝の時代は、儒教とそれを政治理念とする官僚の誕生したきわめて重要な時代であることはいうまでもない。董仲舒の対策の結果、建元五年(前一三六年)五経博士官が設けられ、ついで同じく儒学を修めて丞相となった公孫弘の建議により学校制度が確立した。この学制の大体は――博士官のもとに弟子員五十人を置き学問を教授する。弟子は租税を免除する。弟子の選抜は二通り、一つは、民のなかから十八歳以上の威儀行状の方正なる者を、太常(宗廟礼儀を司り、博士もこの監督下にある)が直接に選ぶ。一つは、郡・国・県・道・邑に学問があって行状の正しい者があれば、地方官はこれを所轄の長に推挙し、所轄の長はこの中より優秀なる者を選抜し、毎年地方から朝廷に財政報告に上る計吏がこの選抜生を引き連れて太常のもとに送り、博士弟子と同様の授業を受けさせる。一年たつと試験を行い、一経以上に通じた者は文学・掌故の欠員に補し、優秀にして郎中に任官するにふさわしい者は、太常がその名簿を作成して奏上し、なかでも特に優秀なる者は、その姓名を奏上する。また、もし学業を怠る者、もしくは才能の薄い者、一経にも通ずることのできない者は、これを解任する――という内容であった(史記儒林列傳序)。またこれと同時に、天下の郡国にも皆学校を立てた(漢書巻八九循吏文翁傳)。これより公卿大夫士吏、斌斌として文学の士多し、と儒林列傳は序を結んでいる。武帝は儒者公孫弘を丞相に採用し、学制を定め、この中から儒教官吏も現われ、たとえば、郡国より選ばれて博士のもとで尚書を学んだ兒寛は、のちに御史大夫の高位に昇り、これは文景時代には考えられなかった儒教官僚の登用ではあるけれども、実際は武帝の時代にも朝廷の儒者はそれほど盛んであったとはいえな

いのである。武帝以前は、官吏となるにも胥吏より進み、また軍人より登ったのに対して、この学制によって官吏の養成と登用の途は一定方向に定ったには相違ないが、武帝一代は、特にその後期において要路にあったのは財務官僚と刑法官吏であった。いまこれを漢書百官公卿表の丞相と御史大夫について調べてみよう。

丞相は、元朔五年（前一二四年）十一月に公孫弘が丞相となり、その年六月に学制に関する前述の建議がなされ、博士弟子員五十人を置いているが（漢書巻六武帝紀）、その後の丞相は次の通りである。

元狩二年（前一二一年）丞相弘薨、御史大夫李蔡爲丞相。

李蔡は飛将軍李廣の従弟で、景帝の時功を積んで二千石に至る。武帝元朔中（前一二八―一二三年）軽車将軍として大将軍に従って匈奴右賢王を撃ち、樂安侯に封ぜられた。（史記巻一〇九李將軍列傳）

元狩五年、丞相蔡有罪自殺、太子少傅嚴青翟爲丞相。

嚴青翟―史記は莊青翟に作る―は、文帝の時、祖父の不識を嗣いで武彊侯に封ぜられた。不識は高祖に従った功将である（史記巻一八高祖功臣侯者年表）。

元鼎二年（前一一五年）丞相青翟有罪自殺、太子太傅趙周爲丞相。

趙周は夷吾の子で高陵侯（史記巻九六張丞相列傳）。父の夷吾は楚王戊の太傅、戊が反いた時諫争して殺された（漢書楚元王傳）。

元鼎五年、丞相周下獄死、御史大夫石慶爲丞相。

石慶は高祖に従った奮の子で、父の奮が先帝に尊ばるるを以て丞相となり、牧丘侯。（史記巻一〇三萬石君傳）

太初二年（前一〇三年）丞相慶薨、太僕公孫賀爲丞相。

前漢の経師

公孫賀は騎将軍として匈奴を撃つの功により、南窌侯。（史記巻一一一衛將軍驃騎列傳）

征和二年（前九一年）丞相賀下獄死、涿郡太守劉屈氂爲丞相。

劉屈氂は武帝の庶兄中山王靖の子。その初歴は分らぬが、獄吏としての能力を買われたものである。澎侯。（漢書巻六六劉屈氂傳）

征和三年、丞相屈氂下獄要斬、四年大鴻臚田千秋爲丞相。

田千秋は高廟衛寝の郎のとき、衛太子の冤罪を告げて武帝に悦ばれ大鴻臚を拝した。富民侯。田千秋はとりたて才能学術があるわけでなく、ただ一言寤意を以て旬月にして宰相に抜擢されたのは他に例を見ないという。（漢書巻六六田千秋傳）

公孫弘以後の武帝一代に、儒学を治めて丞相となったものはいない。しかも、ただ謹厳実直のみで特に才能が無かったといわれる石慶を除いては、皆罪を得て死している。

次に御史大夫を見ると、兒寛以後は次の通りである。

元封三年（前一〇二年）膠東太守延廣爲御史大夫。

天漢元年（前一〇〇年）濟南太守琅邪王卿爲御史大夫、二年有罪自殺。

延廣・王卿の二人はその事跡は不詳である。

天漢三年、執金吾杜周爲御史大夫、四年卒。

杜周は酷吏である。治獄酷烈を以て聞えた。初め南陽太守酷吏義縱の爪牙の吏。（漢書巻六〇杜周傳）

太始三年（前九四年）光祿大夫河東暴勝之公子爲御史大夫、三年下獄自殺。

暴勝之は光祿大夫を以て直指使者となる。繡衣を著、斧を持って盗賊を討って威名があった。（漢書巻六六王訴傳）

征和二年（前九一年）大鴻臚商丘成爲御史大夫、四年坐祝詛自殺。

商丘成はその初歴は不詳。戻太子事件のとき、大鴻臚として力戦し叛将張光を獲えた。（漢書劉屈氂傳）

後元二年（前八七年）捜粟都尉桑弘羊爲御史大夫、七年坐謀反誅。

桑弘羊は雒陽の賈人の子で、暗算に巧みで十三歳で侍中となり、国家会計を担当した。（史記巻三〇平準書）その出自不明のものもあるが、みな儒生経術の士ではない。公孫弘が春秋を以て白衣より天子の三公となり平津侯に封ぜられてより天下の学士は靡然として学に向う（史記儒林列傳序）風気は支配的となったが、その社会情勢はまだまだ儒教官僚の朝廷における地位を拒むものがあった。

いったい武帝の政治は、その内治よりもむしろ外征に力を用いたといえよう。武帝即位後の数年間は、景帝以来の対匈奴和親策が持続されていたけれども、建元六年（前一三五年）竇太后の死によって、武帝は和親策を捨て、以後長年月にわたる対匈奴戦争が開始される。漢書武帝紀によると、元光年間（前一三四―一二九年）より元狩四年（前一一九年）に至る十年余の間に都合十回の出兵が行われており、一回の出兵には数万騎から数十万騎を動員している。匈奴出兵は元狩四年の出撃で一時中断されるが、その間には新たに南越の内紛と朝鮮王の違背問題とが起り、元鼎五年（前一一二年）四将十万の将兵を南越の首都番禺に出撃させ、元封二年（前一〇九年）朝鮮に向けて水陸両軍を出撃させた。しかも、太初二年（前一〇三年）には二万騎により匈奴出兵が再開され、以後、天漢二年（前九九年）三万五千、天漢四年二十万余、征和三年（前九〇年）十三万の出兵が繰り返されている。これらの出兵の動員数は前戦軍士だけの数であり、後方の糧道組織を考えると膨大な数にのぼり、巨額な財政支出は想像に余る。これに加えて軍士帰還後の軍功による

賞賜の費用もまた莫大なものであった。たとえば元狩四年（前一一九年）の出兵の時の出征軍士に対する賞賜だけでも五十万金すなわち五十億銭を要したという。武帝即位当初は文景時代の蓄積によって、「民は満ち足り、都鄙の穀倉は満ち溢れ、府庫は貨財を余し、京師の銭は巨万を重ね、太倉の粟は充溢して外に野積みにされ腐敗して食べられないありさまであった」（史記平準書）ほどの豊富な貨穀は、相継ぐ外征によって消耗し尽し、昭帝が即位したころは、「武帝、多く士衆を殺し、百姓流離し、物故する者半ばを過ぎ」（漢書夏侯勝傳）「師旅の後、海内虚耗し、戸口半減する」（漢書巻七昭帝紀）状態に立ち至った。武帝も末年には征伐の事を後悔し、富民侯田千秋を丞相に任命した。これは顔師古によると、百姓の殷実を欲し、富民の嘉名に与かろうとしたもので、田千秋の能力を評価したわけではないが、その時、詔勅を下して「方今の務は農に力むるに在り」と言っており（漢書巻二四食貨志上）、民生の安定と国家財政の立て直しは急を迫られていたのであった。この財政立直しの任に待望されたのが桑弘羊等の財務官僚なのである。

また一方、人民の疲弊につれて、吏民の無秩序も甚しく、史記酷吏列傳を見ると、「吏民はいよいよ法を犯し、盗賊はますます起った。南陽には梅兎・百政、楚には叚中・杜少、齊には徐勃、燕趙の間には堅盧・范主らの賊がはびこり、数千人の大群盗が勝手に自ら名乗って城邑を攻め、兵器を奪い、極悪の囚人を解き放ち、郡守都尉を縛りあげ、二千石を殺し、諸県に檄を飛ばして糧食を要求した。小郡盗に至っては百を越え、村里を掠奪することは数え切れなかった。そこで武帝は、はじめ御史中丞や丞相長吏を遣わして取り締りに当らせたが、なお禁圧できず、光祿大夫范昆・諸部の都尉及び故の九卿張徳らに、繡衣を著せ符節を与え、兵を徴発して討撃させ、ようやく戦果をあげ、多いときは万余の首級を挙げた。法令を発布して、賊に飲食物を供することを罰し、これに連坐するものは群ごとに数千

人にも達した。こうして、数年のうちに群盗の巨魁を捕えた。しかし逃散した賊が、再び徒党を組み、山川の険阻にこもって群をなすのは何如ともし難かった。そこで『群盗が起っても摘発せず、または摘発しても一定数を捕縛できない者は、二千石以下小吏に至るまで、その責任者は死罪に処す』という沈命の法（盗賊匿蔵罪）を設けた。だが、小吏は誅罰を恐れて盗賊が起ってもあえて摘発しなかった。捕縛できずに法の制限に触れ、郡府に累を及ぼすことを恐れたからである。郡府も摘発させないようにした。このために盗賊はまた次第に多くなったが、官吏は上下互いに匿し合い、『盗賊なし』の虚偽の報告書を作って法令を避けるありさまであった」という。ここに、繡衣を著、斧をふるって盗賊を討ったという暴勝之や杜周らの酷吏の活躍があったのである。この当然の結果として詔獄の汎濫と刑吏の増大とが伴い生じてくる。杜周傳に云う、「杜周が廷尉となってから詔獄はますます多くなった。二千石の獄に繋がれる者は新旧相交えて百余人を下らず、また郡の太守や丞相府の事件はみな廷尉のもとに挙げられ、これらは一年余で千余件に達した。大事件では連坐して証人の取り調べを受けるものは数百人、小事件でも数十人、遠方からは数千里、近い所でも数百里の地から召換された。訊問には、獄吏は法文に従って告発弾劾し、服罪しなければ笞うって罪を定めた。このため召換を聞くとみな逃げ匿れた。長く獄にあるものは大赦令がでても恩恵に浴さないこともあり、ひとたび逃げ匿れて十余年を経て告訴されたものは、ことごとく不道の罪以上の大罪に処せられた。廷尉及び中都官の扱った詔獄の罪人は六・七万人に及び、官吏の増加は十余万人にのぼった」という。

以上のように当時の社会経済情勢は非常に緊迫しており、その情勢に余裕のあった武帝即位当初に定められた学校制度、官吏登用の途は、武帝一代においては到底実現されることができなかったのである。この社会経済情勢が緩和されるのは、昭帝・宣帝の時代である。漢書食貨志上に云う、「昭帝の時に至り、流民稍々還り、田野益々闢け、頗

る畜積有り。宣帝即位し、吏を用ふるに多く賢良を選び、百姓土に安んじ、数歳にして穀は石五銭に至る」と。また循吏傳に云う、「孝昭幼仲に、霍光政を秉り、奢侈師旅の後にして海内虚耗せしを承け、光、因りて職を循守し改作する所無し。始元・元鳳の間（前八六―七五年）に至り、匈奴、化に嚮い、百姓益々富む。賢良文學を舉げ、民の疾苦する所を問う。孝宣に至るに及び、仄陋より至尊に登り、閭閻より興りて民事の艱難を知る。常に称して曰く、『庶民の、その田里に安んじて歎息愁恨の心なき所以の者は、政、平かにして訟、理まればなり。我とこれを共にする者は、それただ良二千石か』と。おもえらく、太守は吏民の本なり、数々変易すれば則ち下、安からず。民はそのまさに久しきを知れば欺罔すべからず、乃ちその教化に服従せん、と。故に二千石の治理に效ある者は輒ち璽書を以て勉厲せしめ、秩を増し金を賜い、あるいは爵、関内侯に至り、公卿、缺くれば則ち諸々の表する所のものを選び、次を以てこれを用う。是の故に漢世の良吏是に於てか盛んとなり、中興と称せり」と。このように、昭宣に至って民生が安定したのは、もちろん「吏を用うるに多く賢良を選び」「賢良文学を挙げ」用いた官吏の人材登用と無縁ではない。漢書循吏傳は七人を挙げ、このうち武帝時代の人は、その初期に郡国学校制度の基を定めた文翁のみで、他の六人はすべて宣帝時代の人であって、「王成・黄覇・朱邑・龔遂・鄭弘・召信臣ら、彼らの居るところ、民は富み、彼らの去る所、民は後を慕い、生きては栄名あり、死しては奉祀せられた。廩廩として徳讓君子の遺風にちかい」と称賛されている。彼らの治績は、たとえば――

王成爲膠東相、勞來不怠、流民自占八萬餘口、治有異等效。

黄覇爲潁川太守、行敎化而後誅罰、以外寛内明得吏民之心、戸口歳增、治爲天下第一。

龔遂爲渤海太守、民安土樂業、開倉廩假貧民、選用良吏、尉安牧養焉。

召信臣爲南陽太守、開通溝瀆、以廣溉灌、郡中莫不耕稼力田、百姓歸之、戸口增倍。

という効果を挙げた。そしてこれらの官吏は、実は武帝の時に定められた学校制度の中から育てられた官吏、いわば儒学官僚なのである。黄霸は尚書を学んで賢良に挙げられ、朱邑も郷里より賢良に挙げられ、龔は遂明経を以て官となり、召信臣は明経甲科を以て郎となった。宣帝の世はその良吏—儒学官僚の登用によって「中興」の称があるのである。ひるがえって、漢初文景時代は、秦末から高祖にかけての動乱期を経験した社会を承けたので、戦乱を止め民を休息させて社会の健康を回復し、膨大な貨穀を畜積するに至ったのであるが、昭宣時代もこれに譬えることができよう。武帝後期の被弊した社会を承けて、その経済と治安を回復したのである。ただし、その大きな相違は、その政治の根底にある思想である。すなはち、文景は無為を尊んで黄老に任せたのに対し、昭宣は儒学を採用したのである。この儒学の採用は武帝の意図したものであるから、昭宣は武帝の路線を継承したといえようが、儒学を官僚機構の中に組み込んで完成させたのは昭宣時代、特に宣帝の時であった。いまこれを、先に武帝時代について試みたように、漢書百官公卿表の丞相と御史大夫についてみると、丞相は次の通りである。

昭帝元鳳四年（前七七年）丞相千秋薨、御史大夫王訢爲丞相。

王訢は郡県の吏を以て功を積み、被陽の令。宣春侯。（漢書巻六六王訢傳）

元鳳五年、丞相訢薨、六年御史大夫楊敞爲丞相。

楊敞は大将軍幕府に給事し、軍司馬となり、霍光に愛厚せられて大司農となる。安平侯。（漢書巻六六楊敞傳）

元平元年（前七四年）丞相敞薨、御史大夫蔡義爲丞相。

蔡義は明経を以て挙げられ、大将軍幕府に給事し、昭帝に韓詩を説いて認められ光祿大夫給事中に抜擢された。

前漢の経師

陽平侯。（漢書巻六六蔡義傳）また韓詩を治めて博士となったともいう（史記建元以来侯者年表）。

宣帝本始三年（前七一年）丞相義薨、少府韋賢爲丞相。

韋賢は禮・尚書に通じ、魯詩を教授して鄒魯の大儒と称せられた。博士となる。扶陽侯。（漢書巻七三韋賢傳）

地節三年（前六七年）丞相賢賜金免、御史大夫魏相爲丞相。

魏相は少くして易を学び、賢良に挙げられ、対策に高第して茂陵の令となる。易経に明るく師法があった。高平侯。（漢書巻七四魏相傳）

神爵三年（前五九年）丞相相薨、御史大夫丙吉爲丞相。

丙吉は律令を治めて魯の獄吏となり、功労を積んで廷尉右監。もと獄吏より起ったが、後に詩・禮を治めて皆大義に通じた。博陽侯。（漢書巻七四丙吉傳）

五鳳三年（前五五年）丞相吉薨、御史大夫黄霸爲丞相。

黄霸は少くして律令を学び、郡の銭穀の計を領した。夏侯勝に従って尚書を学び賢良に挙げられた。建成侯。（漢書循吏黄霸傳）

甘露三年（前五一年）丞相霸薨、御史大夫于定國爲丞相。

于定國は少くして法を学び獄吏となる。師を迎えて春秋を学び、身に経を執り、北面して弟子の礼を備え、尤も経術の士を重んじた。西平侯。（漢書巻七一于定國傳）

元帝以後もまた次の通りである。

永光元年（前四三年）丞相于定國賜金安車駟馬免、二年御史大夫韋玄成爲丞相。

韋玄成は韋賢の子で、父の保任により郎となり、明経を以て抜擢されて諫大夫となる。父に魯詩を学び石渠に論じた。扶陽侯。（漢書韋賢傳）

建昭三年（前三六年）　丞相玄成薨、御史大夫匡衡爲丞相。

匡衡は学を好み、射策甲科をもって太常掌故となり、中郎より博士に遷る。齊詩を伝えた。樂安侯。（漢書巻八一匡衡傳）

成帝建始三年（前三〇年）丞相衡免、四年右將軍王商爲丞相。

王商は外戚である。宣帝の舅を以て樂昌侯。（漢書巻八二王商傳）

河平四年（前二五年）丞相商免、諸吏散騎光祿大夫張禹爲丞相。

張禹は長安に遊学し易・論語を学び郡文学に挙げられる。師法あり博士となる。安昌侯。（漢書巻八一張禹傳）

鴻嘉元年（前二〇年）丞相禹賜金安車駟馬免、御史大夫薛宣爲丞相。

薛宣は少くして廷尉書佐、都船獄吏となる。高陽侯。（漢書巻八三薛宣傳）

永始二年（前一五年）丞相宣免、執金吾翟方進爲丞相。

翟方進は左氏春秋を学び、積むこと十余年、経学明習にして諸儒これを称揚した。射策甲科を以て郎となり、明経に挙げられ、議郎に遷る。のち博士となり、劉歆に左氏春秋を教えた。高陵侯。（漢書巻八三翟方進傳）

綏和二年（前七年）丞相方進薨、左將軍孔光爲丞相。

孔光は孔子十四世の孫で、経学明習、少くして議郎に挙げられ、成帝の時博士となる。博山侯。（漢書巻八一孔光傳）

哀帝建平二年（前五年）丞相光免、御史大夫朱博爲丞相、

朱博は少いとき県に給事して亭長、遷って功曹となる。陽郷侯。（漢書巻八三朱博傳）

同年丞相博有辠自殺、御史大夫平當爲丞相。

平當は少くして大行治礼丞となり、大鴻臚文学に補せられた。明経を以て尚書博士となる。関内侯。（漢書巻七一平當傳）

建平三年、丞相當薨、御史大夫王嘉爲丞相。

王嘉は明経射策甲科を以て郎となる。新甫侯。（漢書巻八六王嘉傳）

元壽元年（前二年）丞相嘉下獄死、御史大夫孔光爲丞相。

これを見ると、昭帝の時、大儒蔡義が丞相位に昇ってより以後、宣帝一代の丞相はみな儒学を修め、元成哀三代もほとんど儒学を修め、しかも、蔡義・韋賢・魏相・黄霸・韋玄成・匡衡・張禹・翟方進・孔光・平當らはみな一代の名儒である。儒学を積まずに丞相となったものは、たとえば獄吏出身の薛宣のように、経術に浅きを以て軽侮されて罷免され（漢書薛宣傳）、武吏の朱博は辠を得て自殺し、「道徳を思わず、その事行已に言うべきなし」（漢書巻八三贊）と評されているように、儒学の素養なくしては、もはやその高位を保つことができなくなっていたのである。

また御史大夫はおおむね丞相に昇り、昭帝の時の王訢・楊敞・蔡義、宣帝時の魏相・丙吉・黄霸・于定國、元帝時の韋玄成・匡衡、成帝時の薛宣、哀帝時の朱博・平當・王嘉・孔光らはみな御史大夫より丞相に昇進したものであるが、この他に儒学を修めて御史大夫となったものは次の通りである。

宣帝神爵三年（前五九年）大鴻臚蕭望之爲御史大夫、三年貶爲太子太傅。

蕭望之は学を好み齊詩を治めて太常の博士のもとで学び、また夏侯勝に従って禮服を問い、五経名儒の称があ

る。石渠に論じた。（漢書蕭望之傳）

元帝初元五年（前四八年）長信少府貢禹爲御史大夫、十二月卒。

貢禹は明経絜行をもって聞え、徵されて博士となる。（漢書巻七二貢禹傳）

同年長信少府薛廣德爲御史大夫、一年以病賜安車駟馬免。

薛廣德は楚国で魯詩を教授し、御史大夫蕭望之の属官となる。博士となり石渠に論じた。（漢書薛廣德傳）

永光二年（前四二年）右扶風鄭弘爲御史大夫、五年有辠自殺。

鄭弘は明経を以て太守となった。（漢書巻六六鄭弘傳）

成帝綏和二年（前七年）三月廷尉何武爲御史大夫、四月爲大司空、一年免。

何武は博士官で学業を受け、詩を治めた。射策甲科を以て郎となる。（漢書巻八六何武傳）この時から御史大夫は大司空と改め、後またもどした。

綏和二年、大司馬師丹爲大司空、四月徙。

師丹は齊詩を治め、匡衡に師事し、元帝の末年博士となる。（漢書巻八二史丹傳）

哀帝元壽二年（前一年）光祿大夫彭宣爲御史大夫。

彭宣は易を治めて張禹に師事し、博士となる。（漢書巻七一彭宣傳）

以上は丞相御史大夫の重職に在ったものであるが、以下の官僚においても、儒学を治めて名ある学者が多く、儒林傳を見れば、昭宣以降の儒者はほとんどみな官職を得ているのである。武帝が、董仲舒・公孫弘を用いて計画した賢良による官僚機構は、昭宣以下の時代にその完成を見るのであり、この意味において、昭宣時代は一つの画期時代であ

るといえよう。

(四)

漢書儒林傳贊に云う——

自武帝立五經博士、開弟子員、設科射策、勸以官祿、訖於元始、百有餘年、傳業者浸盛、支葉蕃滋、一經說至百餘萬言、大師衆至千餘人。蓋祿利之路然也。

武帝が五経博士を立て、弟子員を開設し、そこに官吏登用の科を設けて試験を行い、官職秩禄を与えて儒学を奨励するようになってから、平帝の元始（後一—五年）年間に至る百余年の間に、学業を伝えることがしだいに盛んとなり、それにつれて学問の枝葉もますます広がり、一経の説が百余万言にも及び、名ある経師も千余人の多きに至った。これは、禄利を与えて学問を奨励した結果なのである。

武帝の立てた学校制度は、昭宣時代に実質を具えたことは先に述べた通りであるが、このことは取りも直さず儒学が職業化したことを意味する。右に云う「傳業者浸盛、支葉蕃滋、一經說至百余萬言、大師衆至千餘人」のさまは、経書の研究が細緻となり、特にその解釈論が多岐になってゆく過程で、経学の進歩という点から見ればまことに隆盛の極みといえようが、これに官職禄利を与えて奨励するとき、学問より官吏になる途も開けたけれども、逆に言えば、官吏となるには学問を積まねばならず、学問を積むには師に就き大学に学ぶということになる。学校が官吏養成所となるのもまた当然の帰結といえよう。いったい漢の経学の特色として、師法、すなわち師弟相伝授し師の説を墨守し

で改めないといわれている。しかしこの師法とは一体どのようなことなのであろうか。もし漢儒が師法を墨守したといえば、儒林傳に見られるような、一師のもとから種々の学派が分れ、分れたものが又一派をなすということがないはずである。ところが実際には、例えば、易は田何を本とするが、二伝して武帝の時に田王孫が博士となり、門下に施讎・孟喜・梁丘賀があり、この三氏の易学はみな博士官に立てられた。もっとも、孟喜は師法を改めたとされて本人は博士になれなかったが、弟子の白光・翟牧の二人はのちに博士となった。また施讎の弟子の張禹、張禹の弟子の彭宣はおのおの一家を成し、梁丘賀の弟子の衡咸・鄧彭祖・士孫張はおのおの一家を成している。このような分派は他の経についても同様であり、すでに学派なり分派が一家の学として勢力を持って来ると、そこに朝廷公認の学として博士官の講座に設置する要求が始まる。公認の学として学官に立てられ、博士として諸生に教授することが、その学問を盛んにする唯一の道であると同時に、一門の子弟の官職に就く道を確保することでもある。もし学官に立てられなければその学問がいかにすぐれていても、あくまで民間の学で、弟子たちの官職に就く道も開かれない。のちに劉歆が古文学を好み、熱心にこれを学官に立てようと運動したことも、これにあるのである。学問が官職祿利に結び付けば、学校が官吏養成所となるのも自然の趨勢であった。漢書儒林傳贊によれば——

初、書唯有歐陽、禮后、易楊、春秋公羊而已。

至孝宣世、復立大小夏侯尚書・大小戴禮・施孟梁丘易、復立京氏易。

平帝時、又立左氏春秋・毛詩・逸禮・古文尚書。

というように、次第に博士官が増え、これに合せて弟子員も増大する。漢書儒林傳序に云う——

昭帝時擧賢良文學、增博士弟子員滿百人。

宣帝末增倍之。

元帝好儒、能通一經者皆復。數年以用度不足、更爲設員千人、郡國置五經百石卒史。

成帝末、或言孔子布衣養徒三千人、今天子太學弟子少。於是增弟子員三千人。歲餘復如故。

平帝時王莽秉政、增元子之子得受業如弟子、勿以爲員。

右のような昭宣以後の博士官の増立と弟子員の増大は、先に述べた経師たちの要求に基づいているのである。

漢書儒林傳には「某経に某氏の学あり」「某氏に某の学あり」という形式の記述が、各経について見られ、これは漢初に経を伝えた祖師から師弟伝授の間に、しだいに学派が分れ、それがさらに分派していく過程を明確に示しており、(5)そして、この形式の記述によって示される分派はすべて昭宣以後の時代である。

易は五氏四家に分派している。

由是易有施・孟・梁丘之學

施讎（博士）孟喜（丞相掾）梁丘賀（少府）は皆宣帝の時の人で、ともに田王孫門下である。すなわち漢初の田何より田王孫に至る易学は、宣帝の頃三派に分れた。その後三家はまた次のように分派する。

由是施家有張・彭之學

張禹（博士—丞相）は成帝の時の人、彭宣（博士—大司空）は張禹の弟子である。

由是孟家有翟・白之學

翟牧（博士）白光（博士）は宣帝の時の人である（王國維兩漢博士題名考による）

由是梁丘有士孫・鄧・衡之學

士孫張（博士―光祿大夫給事中）鄧彭祖（真定太傅）衡咸（王莽講学大夫）は成哀の頃の人と思われる。

由是易有京氏之學

京房（魏郡太守）は宣元の頃の人。京房の師は焦延壽で、焦延壽はかつて孟喜より易を問うたと自称していたので孟喜の死後、京房は焦延壽の易を孟氏学と定めた。真偽は分らぬが、もしそうだとしたらこれも孟氏の一つの分派である。

由是易有高氏之學

高相は費直（單父令）と同時で成帝の後の人と思われる。高相の易は田王孫の師の丁寛から受け継いだと自称しているが、もしそうだとしたら高相氏易の祖師も田何ということになる。費直はその本づくところは不詳である。二氏の易は学官に立てられなかった。

尚書は三氏九家に分派している。

由是尚書世有歐陽氏之學

歐陽氏は代々尚書を伝えて来たが、一家を成したのは歐陽高（博士）の代と思われ、歐陽高は昭宣の頃の人と思われる。

由是尚書有大小夏侯之學

大夏侯勝（博士―長信少府）勝の従兄の子、小夏侯健（太子少傅）は昭宣の頃の人である。歐陽大小夏侯氏の学はみな兒寛より出ているというから、兒寛以前すなわち武帝の頃は尚書は分れていなかったのである。このように尚書の分派は昭宣の頃に起り、その後、三氏の学は次のようにさらに分派する。

由是歐陽有平・陳之學

平當（博士—丞相）陳翁生（信都太守）は成哀の頃の人である。ともに林尊の弟子で、林尊は歐陽高に学び、一方歐陽氏は代々子孫に伝え、高の孫の地餘は林尊と同じく宣元の頃の人で、博士となっているから、歐陽地餘を本家とすれば、平當・陳翁生は分家に当り、すなはち歐陽氏尚書はこの頃三学派があったことになる。

由是大夏侯有孔・許之學

孔霸（博士—高密相）は昭元の頃の人である。許商は、孔霸と同門で石渠に論じた周堪の弟子で、元成間の人である。

由是小夏侯有鄭・張・秦・假・李氏之學。

みな石渠に論じた張山拊の弟子で、鄭寛中（博士—光祿大夫）張無故（廣陵太傅）秦恭（城陽内史）李尋（騎都尉）は元成の頃の人であるが、假倉（膠東相）はやや早く謁者を以て師とともに石渠に論じている。かく、張山附の弟子はみな一家を名乗っている。

魯詩は四氏一家に分派している。

由是魯詩有韋氏之學

韋賢は子の韋玄成（丞相）に伝え、玄成は淮陽中尉を以て石渠に論じ、哀帝に詩を教授した。一家を称したのは韋玄成の時であろう。

由是魯詩有張・唐・褚氏之學

張長安（博士—淮陽中尉）唐長賓（博士—楚太傅）褚少孫（博士）は宣元の頃の人で、張長安は石渠に論じた。皆宣帝

の時の博士王式の弟子である。かく、魯詩の分派は宣帝の時に始まる。張氏はまた次のように分派する。

由是張氏有許家之學

許晏（博士）は哀帝の頃の人と思われる。

齊詩は四氏に分派する。

由是齊詩有翼・匡・師・伏之學

翼奉（諫大夫）匡衡（博士―丞相）は后蒼の弟子で、師丹（博士―大司空）伏理（高密相）は匡衡の弟子である。皆元成の頃の人である。かく、齊詩の分派は元成の頃に起る。

韓詩は三氏に分派する。

由是韓詩有王・食・長孫之學

王吉（博士―昌邑王中尉）食子公（博士）は宣帝の頃の人で、ともに蔡義の弟子である。長孫順（博士―豊部刺史）は王吉の弟子である。かく、韓詩の分派は宣帝の時に起る。

禮は三氏三家に分派する。

由是禮有大戴・小戴・慶氏之學

大戴德（信都太傅）小戴聖（博士―九江太守）慶普（東平太守）はみな宣帝以後の人で、戴聖は博士を以て石渠に論じた。かく、禮の分派は宣帝の時に始まり、その後更に次のように分派する。

由是大戴有徐氏、小戴有橋・楊氏之學

徐良（博士―郡守）橋仁（大鴻臚）楊榮（琅邪太守）はみな成哀の頃の人である。

春秋公羊は二氏四家に分派する。

由是公羊春秋有顔・嚴之學

顔安樂（齊郡太守丞）嚴彭祖（博士―太子太傅）は宣帝の時の人で、ともに眭孟に学んだ。かく、公羊の分派は宣帝の頃に始まり、のち顔氏は次のように分派する。

由是顔家有泠・任之學、顔氏復有筦・冥之學。

泠豊（濟川太守）任公（少府）は成帝の頃の人と思われる。筦路（御史中丞）冥都（丞相史）はそのやや後か。

穀梁春秋は四氏に分派する。

由是穀梁春秋有尹・胡・申章・房氏之學

尹更始（長樂戸將）は宣帝の時石渠に論じた。胡常（博士―部刺史）申章昌（博士―長沙太傅）は宣元の頃の人で、三人それぞれ師を異にするが、祖師は瑕丘江公である。房鳳（青州牧）は尹更始の弟子で、成帝の頃の人である。かく、穀梁春秋は宣元の頃に分派が起る。

以上のように漢書儒林傳について見るかぎり、漢の経師が一家の看板を掲げ初めたのは、ほとんど時を一にして宣帝の頃に起っている。ここにおいて、宣帝の末年、石渠閣に諸儒を会して、五経の異同を講論し、多岐煩雑化してきた経説を整斉する必要に迫られたのであった。

ところで、この学派の分岐は、先に述べたように博士官の増設と深い関係があるが、いま、漢の朝廷の博士について考えてみると、武帝以前の博士とそれ以後については、博士の性格に相違があるということは、すでに狩野博士が指摘されておられる。すなわち、「漢武以前は単に博士というものなるに対し、武帝以後のものは、五経博士にして、

苟も博士といへば、それが即ち某経の専門家であったことである」（兩漢學術考）武帝以前の博士は、史記その他に見ると――

高祖時代　叔孫通　隨何

惠帝時代　孔襄

文帝時代　申公　韓嬰　賈誼　鼂錯　公孫臣

景帝時代　轅固生　胡母生　董仲舒

右の十一人を数えるが、この中、詩の申公・韓嬰・轅固生、春秋の胡母生・董仲舒を除いては特定の経の専門家であったとは見えていない。鼂錯は、命を受けて伏生より尚書を授ったといい、後に博士となっているから、尚書を以て博士となったとも思われるけれども、鼂錯傳によれば、その前の文に「以文學爲太常掌故」とある。太常とは礼儀を管掌する官庁で、博士も掌故もその監督を受け、掌故といい博士いい秩に高下あるのみで、要するに先に掌故であったが、後博士に遷ったまでで、尚書専門の学者として博士となったわけではない。賈誼は、漢書儒林傳には春秋左氏を伝えたとあるが、左氏はまだ学官に立てられていなかったから、左氏を以て博士となったというわけではない。そこで、詩の申公・韓嬰・轅固生、春秋の胡母生・董仲舒も、前に挙げた専門の学者でないものと同じく博士となって、その間になんら区別のないところを見ると、彼らは専門家には違いないが、その挙げられて博士となったのは、他の博士と同じく、単に学者であるということで任用されたものであろう、というのである。ここでいま少し齊魯韓三詩について述べると、漢書には齊詩・魯詩・韓詩の呼称があるけれども、史記にはこの呼称はない。史記儒林列傳にはただ次のように云うばかりである。

申公魯人也。歸魯退居家教、獨以詩經爲訓以教。

轅固齊人也。自是之後、齊言詩皆本轅固生也。

韓生者燕人也。其語頗與齊魯間殊、然其歸一也。自是之後而燕趙間言詩者由韓生。

彼らが博士となったのは、狩野博士の言われるように、単に学者であるということで任用されたものであると同時に、この頃はまだ、詩には齊魯韓三学派の区別が明確でなかったろうと思われるのである。石渠会議の時も詩の議奏は行われていない。先に考察したように、諸経の分派は宣帝以後に起っていることを考え合わせるならば、詩が齊詩・魯詩・韓詩と学派を明白に名乗るようになったのは、石渠会議以後のことではないだろうか。

さて武帝以前の博士は、狩野博士の指摘の通りとして、武帝以後の博士について次の二点を指摘しておきたい。一つは、武帝以後の博士は五経博士であって、某経を治めて某経博士となるというように専門化に向うことは云うまでもないが、某経の博士が某経のみを専らに治めた、つまり完全に一経専門であったわけではないということである。韋賢は詩を教授して大儒の称があり、徵されて博士となったが、並びに禮・尚書に通じていた（漢書韋賢傳）。また韋賢の師の博士大江公は、申公に詩及び春秋穀梁を受けている（儒林傳）。穀梁春秋はまだ学官に立こられていなかったので、詩を以て博士となったのであろう。后蒼は夏侯始昌に師事し、始昌は五経に通じ、后蒼もまた詩・禮に通じて博士となった（儒林傳）。梁の相褚大は五経に通じて博士となったといわれ、何経を以て博士となったか明らかでないが、尚書を治めた兒寛は褚大の弟子だったという（漢書兒寛傳）。董仲舒もまた五経の通儒といわれる（儒林傳）。これらはみな石渠会議以前の人である。また宣帝以前の博士には、その学問の伝授が詳かでなく、何経の博士か分らぬものが、史伝に散見する。いま王國維漢魏博士題名考によって挙げると——

史記儒林傳、丞相御史言謹與博士平等議。（武帝元朔五年）
史記三王世家、博士臣將行等、（元狩六年）
漢書武帝紀、元鼎二年夏大水、秋九月詔遣博士中等分巡行。
史記酷吏傳、匈奴求和親、羣臣議上前、博士狄山曰、和親便、（武帝元狩元鼎間）
漢書霍光傳、臣敞等謹與博士臣霸臣雋舍臣德臣虞舍臣射臣蒼、（昭帝元平元年）

この平・將行・中・狄山・雋舍・德・虞舍・射らの諸博士は全く不明である。いわゆる漢儒の師法――一経専門にして他を兼習せず、師より弟子へと伝授する厳格なる師法は、宣元以後のこととなるのである。

いま一つは、宣帝以前の博士が一経専門であるとは限らなかったとともに、一経につき一博士に限るということもなかったということである。以下この例を挙げると、張長安と薛廣德とはともに王式に師事して魯詩を治め、石渠会議に参加した時は二人とも博士であったから、魯詩は同時に二人の博士がいたことになる。だが先に述べたように、詩が齊魯韓三家に明確に分れたのは宣帝石渠会議以降と思われるから、右の二人は魯詩博士と呼ばれていたのではなく、単に詩博士ということであろう。また王式が徵されて博士となったのは、宣帝神爵年間（前六一―五八）前後のことで、この頃同じく魯詩を治めて博士となったものに大江公の孫の小江公がおり、漢書儒林傳に「諸大夫博士共持酒肉勞王式、博士江公心嫉式」云々とあるから、この時もまた同時に二人の詩博士がいたことになる。歐陽地餘は歐陽高の孫で、高の弟子の林尊と一緒に、ともに博士として石渠会議に参加しており、歐陽尚書は同時に二人の博士がいたことになる。しかし、一方張山拊は小夏侯健に師事し、石渠会議にはすでに博士となった後に参加しているが、小夏侯尚書が学官に立てられたのは石渠会議の後であるから、張山拊が小夏侯尚書博士と呼ばれていたはずはなく、単

に尚書博士ということであろう。そうだとすれば、歐陽地餘や林尊が歐陽尚書博士と呼ばれていたのでは矛盾が起るから、石渠会議以前は、尚書も歐陽大小夏侯の区別なく、単に尚書博士であったと推測され、そうなると、尚書博士は石渠会議の時には同時に三人いたことになるのである。さらにまた、申公の弟子の中で、博士となったものは十余人おり（儒林傳）、そのうち名を挙げているのは、孔安國・周霸・夏寛・魯賜・繆生・徐偃・闕門慶忌の七人であるが、これらはほぼ同時に博士となったものと考えられる。

ところで、いま石渠会議以前は、博士官において詩に齊詩・魯詩・韓詩の区別はなく、尚書に歐陽尚書・大夏侯尚書・小夏侯尚書の区別はなかった、と述べたが、そうすると漢書儒林傳贊の「初書唯有歐陽、禮后、易楊、春秋公羊而已」の記述が問題となる。このことについて述べると、先ず易は、「易楊」の記述は「易田」の誤りであろうと思われる。これは王國維の指摘するところで、漢魏博士題名考に云う——

易博士田王孫。案、田王孫師丁寛景帝時人也。弟子施讎・孟喜・梁丘賀皆宣帝時人也。則王孫爲博士當在武帝之世。蓋建元中置五經博士、始爲易博士者卽王孫也。儒林傳贊言、自武帝立五經博士、初書惟有歐陽、禮后、易楊、春秋公羊。然傳言楊何元光中徵爲大中大夫、不云拜博士。蓋易楊乃易田之誤。易家先師田何・楊何・田王孫、或同名、或同姓、故往往相亂。

すなわち石渠会議以前の易博士は、武帝の時の田王孫と、宣帝の時の施讎の師弟が相継ぐのみで、そこに取り立てて施氏易博士と言う必要はない。石渠会議の後に、梁丘氏易が学官に立てられて、初めて区別したのである。春秋も同じことがいえる。春秋は、朝廷では公羊のみが盛んで、春秋といえば公羊であり、他はなかった。穀梁は衛太子がひそかに読んでいた程度で、おおやけには誰も読まなかった。魯の地方で細々と伝えられていたのが、榮廣が現われて

注目を浴び、その弟子の蔡千秋が宣帝の庇護を受けてようやく朝廷に盛んとなり、石渠会議の後に公認の学として博士官に立てられたものである。禮は后蒼以外の学派はなかった。このように見てくると、石渠会議以前は、博士はあくまで五経博士で、某経に某氏の区別はなかったことが分るのである。すなわち博士官における経説の分家は石渠会議の後に起っているのである。石渠会議以前は単に五経博士ではあったが、しかし一経の中に、たとえば尚書の歐陽氏学を治めた歐陽地餘・林尊と、小夏侯氏学を治めた張山拊のように、経説を異にする経師が同時に博士に任用されていたり、易も博士官の施氏の他に梁丘氏・孟氏が勢力を持ちはじめ、春秋は博士官の公羊氏の他に穀梁が朝廷で盛んになり、すでに五経博士のもとに統括し切れない情勢に至っていた。かかる情勢こそ、石渠会議の開催を促した底流であり、流れの表面に立った波が春秋穀梁なのである。後漢書范升傳に云う、「近ごろ有司が京氏易を博士に立てよと請願したが、官吏たちは理にかなった処置をなし得なかった。かくして京氏が立つと、今度は費氏が怨望した。左氏春秋もこれにならって学官に設置されることを求めた。京氏易・費氏易が世に行われているからには、次は高氏易の番である。春秋には三伝の外にもまた騶氏・夾氏の二家がある。だから今もし左氏春秋・費氏易が学官に立てられると高氏・騶氏・夾氏などの奇異な経説がそれぞれ学官設置を要求するであろう」と。これは後漢の人の言葉であるが、石渠会議前夜の学官設置の要求にもそのままあてはまるであろう。

引用原文及び人名・地名には旧漢字をそのまま用いた。

注

(1) 石渠閣は今の国会図書館のごときものであろう。

『漢書』劉向傳注引三輔舊事云、「石渠閣在未央大殿北、以藏秘書。」又、

『後漢書』章帝紀注引三輔故事云、「石渠閣在未央殿北、藏秘書之所。」又、

『後漢書』班固傳兩都賦注同引三輔故事云、「石渠、閣名。在未央宮北、以閣秘書。」

『三輔黃圖』閣云、「石渠閣、蕭何造、其下礲石、爲渠以導水、若今御溝、因爲閣名。所藏入關所得秦之圖籍、至於成帝、又於此藏秘書焉。」又、

班固『兩都賦』序注引銑說云、「石渠、閣名、主校秘書。蕭何造。」

(2)『漢書』宣帝紀云、「甘露三年、詔諸儒講五經同異。太子太傅蕭望之等平奏其議、上親稱制臨決焉。乃立梁丘易・大小夏侯尙書・穀梁春秋博士。」

(3)『漢書』儒林傳云、「施讎字長卿、沛人也。從田王孫受易。梁丘賀(從京房受易)薦讎、詔拜爲博士。甘露中與五經諸儒雜論同異於石渠閣」

又云、「梁丘臨(賀子習梁丘易)爲黃門郎、甘露中、奉使問諸儒於石渠。臨學精孰、專行京房法。」

又云、「歐陽地餘(習歐陽尙書)以太子中庶子授太子、後爲博士、論石渠。」

又云、「林尊字長賓、濟南人也。事歐陽高(習歐陽尙書)、爲博士、論石渠。」

又云、「周堪字少卿、齊人也。與孔霸俱事大夏侯勝(大夏侯尙書)。霸爲博士。堪譯官令、論於石渠。」

又云、「張山拊字長賓、平陵人也。事小夏侯建(小夏侯尙書)、論石渠、至小府。」

又云、「假倉(字子驥陳留人事張山拊治尙書)以禍者論石渠、至膠東相。」

『漢書』韋賢傳云、「韋玄成(賢子治魯詩)受詔、與太子太傅蕭望之及五經諸儒雜論同異於石渠閣、條奏其對。」又、

『漢書』儒林傳云、「韋玄成以淮陽中尉論石渠、後至丞相。」

又云、「張長安(字幼君山陽人事王式治魯詩)爲博士論石渠、至淮陽中尉。」

『漢書』薛廣德傳云、「薛廣德字長卿、沛郡相人也。以魯詩教授楚國、龔勝・舍師事焉。蕭望之爲御史大夫、除廣德爲屬、數〻與論議、器之、薦廣德經行宜充本朝。爲博士、論石渠、遷諫大夫、代貢禹(治公羊春秋)爲長信少府、御史大夫。」又、

『漢書』儒林傳云、「薛廣德(事王式治魯詩)以博士論石渠、至御史大夫。」

又云、「戴聖(字次君梁人事后倉受禮)號小戴、以博士論石渠、至九江太守。」

又云、「聞人通漢(字子方沛人事后倉受禮)以太子舍人論石渠、至中山中尉。」

『漢書』劉向傳云、「初立穀梁春秋、徵更生(劉向)受穀梁、講論五經於石渠。」

(4)『後漢書』孝章帝紀云、「建初四年冬十一月壬戌、詔下太常、將・大夫・博士・議郎・郎官及諸生・諸儒會白虎觀、講義五經同異、使五官中郎將魏應承制問、侍中淳于恭奏、帝親稱制臨決。如孝宣甘露石渠故事。作白虎議奏。」又、

『後漢書』楊終傳云、「終言、先帝博徵羣儒、論定五經於石渠閣。方今天下少事、學者得成其業、而章句之徒破壞大體。

宜如石渠故事、永爲後世則。於是詔諸儒於白虎觀論考同異焉。」又、

『後漢書』蔡邕傳云、「邕上封事曰、昔孝宣會諸儒於石渠。章帝集學士於白虎。通經釋義、其事優大。」

(5) 漢儒は師法・家法を言うが、これは後漢になって明確に意識されたもので、師法とは魯丕の云う「説經者、傳先師之言、非從己出、不得相讓、相讓則道不明。法異者、各令自説師法、博觀其義」(後漢書巻二五魯丕傳) ということ、家法とは范曄の云う「專相傳祖、莫或訛雜、繁其章條、穿求崖穴、以合一家之説」(後漢書巻七九儒林列傳贊) ということ、すなわち、師法とはその源に溯るもので、家法とはその流れを広げるものであるといえよう。そして皮錫端は經學歴史の中で、漢書儒林傳の「某經に某氏あり」の記述形式は、師法を云ひ、「某氏に某の學あり」は家法を云うと論じているが、漢書には家法という語は見えず、この儒林傳の記述形式も決して師法家法に分けられるものではない。要するに一師からの第一次分派と、さらにそれが枝分かれする第二次分派の相違にすぎないと思われるが、なお研究不足のため厳密なことは言えないので今後の課題としたい。